

序

1998年にregular arrangement of collecting venules (RAC)を発表して以来、胃炎・胃癌の研究に没頭してきました。そして消化器内科医人生の集大成の本を出したいと考え、羊土社さんに相談しました。思えば学生時代、NHKに出演した故・市川平三郎先生（当時国立がんセンター病院長）から「胃癌は日本の国民病です。しかし早期発見することで救えます」という内容のお話しを聞き、そして柳田邦男さんが執筆された「ガン回廊の朝」を読み大変感銘し、消化器癌診断に自分の医師人生にかけてみようと考えようになりました。

RACの発見はピロリ菌に未感染の正常の胃の拡大内視鏡像、組織像などの多くの知識を提供してくれ、さまざまな胃研究をはじめることができました。

その後慢性胃炎の進展や癌発生機序が胃研究への大きな課題として残りましたが、そのような研究は一般病院勤務の立場ではなかなか手を出せずにいました。しかし2017年に新潟大学地域医療教育センター・魚沼基幹病院の特任教授に就任することで文部科学省の科学研究費申請の資格を得ることができ、この広大な研究を開始することができました。その内容は本書の第3章、第7章、第8章に記述しています。またgreen epitheliumもこの研究から生まれた副産物でもあります。

この研究のために5,000枚を超えるプレパラートの胃炎と胃癌の免疫染色を引き受けてくださった病理技師の西村広栄氏（2017年当時新潟県立吉田病院、現在県立がんセンター新潟病院）、新潟県立吉田病院の標本使用を許可してくださった中村厚夫先生（県立吉田病院院長）に厚く感謝を申し上げます。

またこの研究にご興味をもってください、遺伝子研究をお薦めくださった新潟大学消化器内科の寺井崇二教授、共同研究者の土屋淳紀准教授、橋本 哲先生（埼玉県済生会川口総合病院消化器内科主任部長）にこの場をお借りしてお礼申し上げます。

2024年現在、RAC陽性のピロリ未感染胃の方々が増加し続けるなか、新しいタイプの胃腫瘍が発表され注目されています。胃疾患研究はこれからも留まることはありません。

胃底腺、幽門腺という固有腺と表層の腺窩上皮という複雑な構造からなり、さらにその固有腺が化生を起こしていくという性格が胃をきわめて興味深い臓器にしています。

この本を手にとった方々が夢をもってワクワクしながら胃の研究の指針として本書を利用してくださることを心から願っています。

2024年9月

まだまだ残暑の続く新潟市の自宅にて
八木一芳